

張り替えられたばかりの障子の照り返りがいかにも清潔で、くまなく明るい感じた。

障子の光線は、ガラス等とちがってぎらぎらした光と影の強烈さはなく、全体にしつとりと明るんで落着ける。洗濯をすませたばかりの手を拭きながら机に座るともう午前十一時を廻っている。昼の献立を見ると白菜と油揚げ、豆腐のケンチャンになっている。あのぐちゃぐちゃに煮込んだ白菜を思っただけでもあまり食欲は湧いてこない。昼のおかずを作るのに何かいい材料はないかなーなんて考える、だが今日は何も無い、仕方がないので缶詰を切って食べることにする。短歌の控帳を見ているとこんな歌が見つかった。昭和三十五年作となっているから去年のものだ。

いささかの野菜てにして料理メモめくればやさし生きていること

私は、今まで料理などと云うものに全くの無関心をよそおってきた。友人の間でも料理の話になると、絶対に煮たり焼いたりすることは嫌いなのだ、と云うことで簡単にすましていた。しかし私は、この歌の中にあます所なく自分の本音を吐いていることに驚いた。

私達のように病んでいるものには当然のことではあるが、いつも出来上った料理に箸を付けるだけで自分で料理して食べるという楽しさがない、それに料理をするにはお金がかかる、療養所の中では出来上った食事が配給されるので簡単なものでも、自分で作るとなるとすべて余分な出費になるのでちよつと不経済だ、しかし残飯で豚を飼っているのだからまるつきり捨てるわけでもないが。

私は幼ない頃、台所で働らいている母の傍で、じゃまになるなどと叱られながら何かと悪戯っぽい仕事をやめなかった。たとえば、だんごを作っている母に、練った粉をすこしもらって、それで果物の形や人形の形など様々なものを作って蒸釜の中でいっしょに蒸してもらったりした。それが又自分で作ったと云う気持で何となく嬉しく蒸し上げるのを待ちかねて何度も蓋を取って見たりしたものだ。又母が夕飯の支度をするとき等には、大根や人参の切り端等をもらってままごとのお鍋の中へ彩どりよく並べたりした記憶もある。

こうして改めて自分を眺めて見ると、根っから料理が嫌いなのではなく、ただいろいろな条件で料理とは縁遠い所にいると云うだけのように見える。だから材料を手にしたとき、不断は必要のないままに忘れられている何かほのぼのしたひとつの楽しさ、女の生の中ににじんでいる料理という優しい仕草が甦ってくるものようである。

豪華な料理などは別問題だが、ちよつとした煮物くらいはこれからもしばしばする機会があるように思われる。私は材料さえ手に入ればこれからは単調な療養生活の中のささやかな彩りとしても心をこめて調理したいなどと思つて見る。

それはともあれ、私の中になつかしい食べ物として浮かんでくるのは、母の手作りの、ぶかつこうにふくらんだ田舎風な、ふくらし粉のにおいがつんと鼻をつくあの大きな饅頭や、それに餡のたっぷり入った草餅、露や竹の子、牛蒡等のふんだんに入ったすしなど、素朴で、それでいて私にとっては忘れることの出来ない故郷の、季節の年毎に重さねられる懐しい行事にちなむ思い出がそれらの料理の中におり込まれていて忘れがたいものとなっている。今でも草餅を食べたりすると、あの幼ない日の思い出が二十年もの月日を越えて星くずのようにきらきらと甦がえり輝き始めるのを覚えてうつとりと遠い彼方に視線を遊ばせていることがある。私にもし何でも欲しい物をご馳走してやろうと誰かに云われたら、私はどんな豪華な料理より、あの故郷の草餅を重曹のにおいの鼻につくあのぶかつこうな饅頭を選ぶに違いない。それは、食べ物を選ぶと云うより、食べ物にまつわる思い出の星くず達が限らない愛着を私にもたせるのである。